



TITLE:

ペゲーリエ氏著『印度支那の米穀市場』

AUTHOR(S):

河野, 健二

CITATION:

河野, 健二. ペゲーリエ氏著『印度支那の米穀市場』. 経済論叢 1942, 54(1): 105-111

ISSUE DATE:

1942-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131631>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十四卷 第二號

昭和十七年二月

論叢

日本經濟學の源流……………

經濟學博士 本庄榮治郎

資本主義的論理……………

經濟學博士 柴田敬

江戸時代の經濟問題……………

經濟學士 堀江保藏

海運政策の積極性……………

經濟學士 佐波宣平

景氣循環過程に於ける消費財產業の意義……………

經濟學士 青山秀夫

研究

マルサス『人口論』の形而上學的基礎……………

經濟學士 白杉庄一郎

事變下の中小工業と金融……………

經濟學士 田杉競

トーマス・マンの重商主義思想……………

經濟學士 堀江英一

說苑

宋代の農田に就いて……………

經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報・外國雜誌論題

説苑

ベグリーエ氏著『印度支那の

米穀市場』

河野 健 二

佛領印度支那とわが國との關係が緊密になるとともに、佛印米なかでも西貢米のわが國への輸入の問題が極めて重要性を有つてきたことは周知の事柄である。佛印米の問題はすでにフランスの多くの學者により研究されてゐるところであるが、その大部分は農業または農業技術の問題として扱えてゐるやうであつて、佛印米を中心とする商業または貿易機構とか輸出市場の分析とかを試みた資料は比較的乏しいやうである。

イーヴ・ペグリーエ (Yves Pégonier) の著書『印度支那の米穀市場』 (Le Marché du Riz d'Indochine.

ベグリーエ氏著『印度支那の米穀市場』

Paris, 1937) は、この方面を扱つたものゝ稀なる文獻の一つである。以下簡単な紹介を試みる。先づ、同書の構成は三篇からなつてをり、第一篇『印度支那經濟における米』では一九三〇年の恐慌が印度支那米ひいては印度支那經濟に與へた影響を述べ、それによつて米が印度支那經濟に於いて如何なる意義を有つかを明かにするとともに恐慌に際して採られた種々の對策とその結果に言及してゐる。第二篇は之を承けて『米穀市場の商業組織』を扱つてをり、國內の集散地としてのシロンと輸出地としての西貢とに大別して其處に於ける取引組織を述べ、とくに西貢に重點を置いて輸出上の種々の問題を検討してゐる。第三篇『販路』は輸出市場の分析に充てられてをり、フランス・支那・日本・歐洲市場の歴史的な究明とそこに於ける種々の問題と將來の展望とを與へてゐる。

二

第一篇の世界恐慌と印度支那米に就いては他にも詳細な研究があるから、簡單にしておくが、著者は世界

第五十四卷 一〇五 第一號 一〇五

1) 例へば Yves Henri; Economie agricole de l'Indochine. André Touzet; L'Economie indochinoise et la Grand Crise universelle. Paul Bernard; Le Problème Economique Indochinois.

恐慌がこの上もなく深刻な影響を印度支那米に與へた原因として、世界的一般的な原因以外に一九二七年の國際銀協定が極東諸國とくに印度支那米の重要な顧客である支那とか印度とかの購買力を著しく減退せしめるに至つたこと、更に印度支那側自體に於いて輸出業者間に何等の組織化が行はれてゐなかつたこと等を主要なものとして擧げてゐる。

一九三〇年四月の相場に比して七二%にも及んだ西貢米の暴落は、米生産とその輸出を基礎としてゐる印度支那經濟を崩壊の危機にまで導いたものであるが、之に對して當然種々の對策が考へられたわけである。この裡で著者は恐慌による販賣停滯と金融逼迫とに對して採られた一九三二年の長期農業金融局の設置を擧げて、それが結局印度支那の錯雜した信用組織を整理し得ず、從つてその莫大な犠牲にも拘はらず零細な生産者を救済し得なかつたことを述べ、更に輸出業者間の共同販賣組織とか共同倉庫建設案とかがその計畫の立派さにも拘はらず、協調精神の缺如とか華僑の反對

勢力とかの爲に挫折してしまつたことを述べてゐる。次に重要な對策として一般に主張されてゐる二つの對策を擧げて、それへの解答を與へてゐるが、その一つは關稅自主の問題であり、他は貨幣制度に關する問題である。

一八九二年以來、印度支那はフランス本國の同化植民地と定められ本國と同一の關稅の適用を受けてをりその結果印度支那は本國工業にのみ開放され他のあらゆる外國に對して閉ぢられて來た。一九二九年に實施を見たキルシェ稅率はこの傾向を一層露骨に示したので、印度支那を極東から完全に遮斷しそれによつて西貢米の極東輸出を減退せしめたものであるが、恐慌に際するに及んでこの緩和或は廢止が重要な問題となるに至つた。著者は印度支那米輸出の上から言つて、關稅改革が不可缺であることを承認してはゐるが、と言つて關稅自主權を直ちに印度支那に附與するのに賛成をしてゐるわけではない。『これはかなり亂暴な解決であり、ことに本國と植民地との鞏固な聯合が必

要とされてゐる今日に於いてはかなり時宜に適しないやり方である。印度支那は現にその收穫物(米)の四〇%以上をフランスに賣つてゐるといふ事を忘れてはならない。關稅自主を許容するならばこの市場が完全に閉鎖されてしまふであらうし、それだけでもかゝる議論を非とするに充分であらう²⁾。結局、著者は餘りに極端な稅率を出來る限り緩和せんとする主張に傾いてゐる。

もう一つの問題はピアストル切下げの問題である。恐慌による諸物價の暴落と銀の下落とともにピアストルの切下げが種々の理由から主張されたのであるが、著者はフランスと異つて印度支那の場合には貨幣の切下げが直ちに國內物價に作用すること及び更にはそれが輸出入品價格に影響して輸出輸入を共に困難ならしめること等を擧げて之に反對してゐる。しかし、結局一九三六年のフランスの切下げによつて之に連繫せるピアストルも切下げられるに至つたことを述べ、然もその場合、切下げ論者の主張にも拘はらずピアストルの

ベグーリエ氏著『印度支那の米穀市場』

切下げは特に極東市場に於いて何等の好影響を與へず問題は依然として残つてゐることを指摘してゐる。

三

第二篇は米の國內市場を扱つてゐる。先づシヨロンを中心として行はれる華僑の米の取引狀況であるが、生産地の小作人および地主の米は支那人の蒐集人の手を経て、シヨロンの粳商人組合の手代達が之をジャンクで運び、ジャンクはシヨロンに到着後支那人の精米業者か或ひはフランス人の精米輸出業者に賣渡される。この際支那人の商人組合は極めて堅固な蒐集網と金融組織とに由つて抜く可からざる勢力を以つてをり彼等の手を経ずしては一粒の粳すら輸出し得ないと言はれてゐる。

従つて西貢に於ける輸出業者は支那人輸出業者は別として米生産者は勿論、中間業者とか精米業者すらを自己の支配下に置くことは出來ない。西貢はかくして單に輸出港としての意義を有つのみであるが、その場合にも種々の缺陷を伴つてゐるために、今日まで充分

な發展を爲し遂げたとは言ひ得ない。

その一は西貢港が自由港と成つてゐないことであるが、之を自由港とすることによつて國內および外國のあらゆる物資の流入を可能ならしめ得るばかりでなく、例へば從來香港で行はれてゐたやうな諸國產の米の混合を行つたり又精米業を自己の支配下に置いたりし得るであらうと説き、更にそのためには輸出業者と米生産業者間の協同精神が必要であると述べ、モロッコの共同倉庫とかビルマの米プールとかをその模範的な例として擧げてゐる。

次に西貢港の缺陷として株式取引所および定期市場が存在しないことが擧げられる。フランスの印度支那への投資額は三十億フランに上るにも拘はらず、投資者は株式相場を正確に知り得ないし、その間に同じ證券について五、六種の相場が立てられてゐるといふ状態であり、投資を中間業者の跳梁から護るためには、株式取引所の開設が必要であり、又米相場の安定を維持し米穀取引の擴大を冀らすためには定期市場の存在

が要求され、それによつて西貢は交趾支那の巨大な寶庫を開發することが出来るであらうと述べてゐる。

米の輸出税の問題は、西貢米の輸出を阻害するものとして早くから多くの反對論を惹き起したものであるが、特に恐慌に際しては米の輸出税が不況の原因であるかの如く論ぜられるに至つた。一九三一年に輸出税は従價六%に下げられたが、それでも尙不充分であるとして、輸出税の撤廢運動が行はれた。著者は之に對して、輸出税が聯邦收入の最大の源泉である點を指摘して早急な撤廢が危險であることを説き、先づ輸出税を他の適當な租税例へば所得税に轉換せしめることが先決問題であることを主張してゐる。

その他、米の品質の改良・西貢米の宣傳組織の確立・米田整備の必要などに關する敘述があるが、これは割愛しておく。

四

第三篇は輸出市場を扱つたものであるが、そこに於いて基本的と言へることは『印度支那は本來絶えず飢

ゑた大なる顧客の眞中に位置してゐる。このことは明かに印度支那にとつて優越的な地位を保證するものであり、巧妙な政策によつて出来るだけ多くの利益をそこから引き出さねばならない³⁾。然し、現實にはこの事は行はれなかつた。それは印度支那がそれに必要な努力を怠つたからであると共に、恐慌とか關稅報復とか經濟的アウタルキーとかの影響に依るものである。しかし、『恐慌の陰鬱な時期以後、情勢はかなり恢復に向つてゐる、この恢復を更に忍耐づよい組織化されたたゝかひに依つて維持するところがなければならな

い⁴⁾』

西貢米の最大の輸出市場は言ふまでもなくフランス本國である。印度支那が他國の植民地の場合と異つて、壓制的な本國中心主義の下に置かれてゐたことは既に述べた。同化關稅制度はその具體的な現はれであつて、それは本國と印度支那間の自由通商と外國に對する通商遮斷とを意圖したものであつた。従つて、この原則よりするならば西貢米は當然にフランス本國へ

ベグーリニ氏著『印度支那の米穀市場』

の自由流入を認めらるべきものであつたが、このことはフランス本國の小麥生産者の利害と衝突したために、その本國流入に對し輸入税を賦課してそれを制限することが有力に主張されたのである。

こゝにフランス市場を繞る困難な問題があつたわけである。著者は之に對し、印度支那の購買力は完全にその輸出代金に依存してゐること、従つて印度支那の本國への輸出を禁ずることは即ち印度支那の本國からの輸入を減少せしめるに他ならないこと、及び西貢米は本國に於いて大部分が家畜飼料として用ひられ食用として用ひられるのはその一〇％程度に過ぎないこと従つて之を本國小麥の生産額に比すれば極めて僅少であること等を擧げて、本國の輸入制限政策に反對してゐる。しかし著者の意圖は飽くまで本國の利益と西貢米輸出業者の利益とを調停する點に存したやうである。『本國農業を保護することは疑ひもなく必要である。たゞ然しながら、それはフランス經濟一般にとつて利益よりも寧ろ害を與へるやうな保護政策であつて

第五十四卷 一〇九 第一號 一〇九

3) Ibid., p. 88.
4) Ibid., p. 89.

はならない。⁵⁾』この問題はしかし恐慌後の小麦の生産減退とともに一應の落着きを得たやうである。著者は本國が西貢米輸出に於いてその四〇％程度を継続的に需要することが望ましいし、特にこのことは次に述べる極東市場の不安定性といふ點からも立證されると説いてゐる。

西貢米の極東における最大の市場は支那市場である。農業國支那が尙ほ外國米の輸入を必要とするのは國家の不斷の動搖狀態・地方經濟の孤立性・交通機關の未發達などに由來するものであつて、主として國內平野との交通不便な上海・香港の近傍に送られるものである。ところが、一九二九年のキルシエ關稅は、支那の工業製品の印度支那への流入を禁止したために、その報復として支那側は西貢米の輸入に禁止的關稅を賦課することとなり、更に合衆國は小麦恐慌の打開を支那市場に求めんとして一九三四年には兩者間に借款が成立するに至り、これらの事情が相俟つて西貢米の支那への輸入は著しい苦境に立つこととなつた。尤も、

一九三五年の印度支那との協商以後は情勢の緩和を見たのであるが、元來支那の對外購買力は支那民衆の極度の貧窮狀態より見るならばその急激な増大を期待し得ないし、更に今後の交通機關の發達とともに外國米を不必要とするに至るであらうから、西貢米にとつては支那市場を安定的な販路と考へることは不可能であるとの結論に到達してゐる。

日本の外國米の輸入は從來主として泰米と合衆國米に限られ、西貢米は殆んど輸入してゐない。加ふるに一九一一年以後の數次に互る日本の努力にも拘はらず、印度支那は依然として日本に對して閉鎖された儘であり、ことに一九二九年のキルシエ關稅設定以後はその報復としても西貢米の輸入を制限せねばならぬ情勢に在つた譯である。『豫期し得ない場合を除いて、日本が印度支那の大なる顧客となる望みは最早存しない。』⁶⁾として著者は日本に對して悲觀的な言葉をしるしてゐるのであるが、著者のこの『豫期し得ない場合』がすでに今日の現實と成つてゐることは、何人も否認

5) Ibid., p. 105.

6) Ibid., p. 128.

し得ない事實である。

その他、ドイツ・ベルギー・ポーランド・ソ聯市場を擧げて説明してゐるが、その多くは將來の開拓に俟たねばならない狀況であると述べてゐる程度である。

五

『米穀市場は、確かに、健全な市場ではある、しかしそれは極度に敏感であり脆いものであつて、僅かの動搖や病弊によつても脅威を受ける』性質のものである。殊に米の單作經營が行はれてゐる國に於いてさうであるが、印度支那の場合にはその上生産・輸出の組織化が行はれてゐない爲にこの傾向は一層顯著である。米穀市場の國內組織の確立とくに信用の再組織が著者の結論として與へる第一の問題である。

第二の輸出市場に關する結論として、著者は、印度支那はその地理的環境よりすれば西貢米の極東市場への進出が考へられる譯であるが、今日ではそれよりも寧ろ現實の政治的環境のほうが重大であり、結局、本國への依存度の強化といふ方向を採るべきであると述

べて、フランス帝國內に於ける協同精神と慎重な政策の樹立を要望し以つて本書の結びとしてゐる。

フランスの印度支那への經濟的進出は、その最大の生産物たる米の取引を自己の手中に收めんとするところから始まるものである。印度支那に於けるフランス人輸出業者の最大の關心は隨つて從來華僑の支配下に在つた米取引を如何にして彼等の手から奪ひ取るかに在つたわけである。本書の著者の意圖もこのやうなフランス的利益を擁護することに在ることは言ふ迄もないが、たゞそれが著者の擧げる輸出業者の組織化、金融機構の整備などに由つてのみ實現し得られるかどうか、或ひは又それらの問題自體が安南人の農業生産とか華僑の取引機構とかに對する何等かの反省なくして可能であるかどうかは残された問題である。更に本書の書かれた一九三七年以後の東亞および世界の新たな諸情勢は印度支那米ひいては印度支那經濟を全く新たな觀點の下に立たしめるに至つたのであつて、これらの點に今後の重要な問題が存するわけである。